

## 〈からだ〉のことを伝える〈ことば〉

[研究ノート]

医療現場における  
業界用語の使用状況

外国人看護師候補者の学習支援に向けて

ポポヴァ・エカテリーナ

Екатерина Попова / Ekaterina Popova

中には、患者やその家族に不安や心配、ストレスなどを抱かせないように意図的に病名などを直接言うのを避け、理解されないように秘密保持の目的で使用される「隠語」と呼ばれる言語変種も存在する。

現在日本では、経済連携協定（Economic Partnership Agreement: EPA）に基づき、インドネシアやフィリピン、ベトナムからの看護師候補者を受け入れている。来日した看護師候補者は、日本の看護師国家資格の取得を目的として、病院などの受け入れ施設において就労・研修することになっている。つまり、外国人の看護師候補者には、日常的に使われる日本語は言うまでもなく、医療現場や国家試験で用いられる専門用語の習得が必要になる。一方、医療現場では、専門用語のみならず、上記のような医療従事者のみで通用する業界用語も多用されるため、円滑に業務を進める上で業界用語の習得も必要になると考えられる。

このような現状にもかかわらず、医療業界用語を調査した研究はわずかであり、日本語教育学の観点からこの業界用語の使用状況について研究したものは管見の限り存在しない。特に、業界用語の中に含まれる隠語は、文字通り、「隠しことば」であり、一部の使用者以外に意図や使用方法があえて開示されることもない。しかも、医療業界は閉鎖性の強い業界であるため、アプローチすることが難しく、隠語使用の実態に関する調査は十分とは言えない。

そこで、本研究では医療現場における業界用語の中の隠語的使用に着目し、その使用状況を明らかにすることで、将来的に、外国人看護師候補者のための日本語教育に業界用語の学習を導入するための手がかりにしたいと考えている。

次節では、来日した外国人看護師候補者の受け入れ態勢や、その外国人看護師候補者に対して行われている日本語教育について述べる。第3節では医療現場における業界用語にどのようなものがあるかを示し、第4節以下では筆者が行った調査の概要を示す。調査結果として第5節では医療業界用語の使用状況について記述し、次に第6節では使用場面と患者への配慮として用いられる隠語の機能、さらに第7節では業界用語使用の問題点を取り上げる。最後に第8節では全体をまとめ、今後の展望を記す。

## 1. はじめに

職場には、それぞれその業界ならではの用語が存在する。それらの用語は一般的に業界用語と呼ばれているが、米川明彦は、この業界用語を「ある職業的集団に共通して使用される職業上の通用語であり、主に職業上の利便性のために、あるいは遊び心で発生したことばである」と定義している（米川 2009: 19）。また、専門用語は一般的に音節数が多いことから、業務の効率化をはかるために生まれる略語や頭文字からなる業界用語が頻繁に使用されると述べている。例えば、警察では公務執行妨害を「公妨」と略し、ホテル業界ではアシスタントマネージャーを「AM」と言う（同上: 20）。

医療の現場でも同僚同士のみで用いる業界用語が広く使用されている。米川は、「アッペ（盲腸）や「タキ（頻脈になる）」などの外国語を起源とするものや、「静注（静脈注射）」や「TB（肺結核）」などの略語を医療業界用語の例として取り上げている（同上: 205-208）。

業界用語には理解困難な用語があり、特に医療の現場では正確に理解しないと医療事故をまねく危険性もある（桐田ほか 2007: 614）。医療現場での勤務経験が少ない新人医療従事者にとって、この医療業界用語は同僚同士でのコミュニケーションの障壁となり得るとも考えられる。さらに、このような業界用語の